國學院大學学術情報リポジトリ

Book Review : AKAI Masuhisa, Research on Tang Era Short Stories

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sawazaki, Hisakazu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000739

〔書評〕

赤井益久著『唐代伝奇小説の研究』

澤﨑久和

近年、中国では唐代小説に関する書籍の刊行が相継いでいる。談愷本『太平広記』影印本十二冊、張国風『太平広記会校』二十冊、李剣国『唐五代伝奇集』六冊などの大部の書の他、特定の主題や作品集ごとの研究書は枚挙にいとまがない。一方、日本でもこの十年余りの間に唐代小説やこれに関連する分野の著書が毎年のように刊行され、また『太平広記』中の作を対象とした訳注も雑誌連載中のものを含めるならば複数種を数える。これを唐詩に関する研究書や訳注の数に比べるならばなお及ばないけれども、従前に比して大きな進展を示すものと言えよう。

ここに取り上げるのは、既発表の論考二十篇余りに書き下ろしの章を加えた唐代伝奇小説に関する専著である。全体は五部からなる。第Ⅰ～Ⅳ部の本論は各部四章、計十六章を、第Ⅴ部の附篇は関連する論考や書評、計五章を収める。巻末に中文と英文の要旨が添えられ、「あとがき」に初出誌情報と各章に関する簡明なコメントが記され、本書を読む上で参考となる。

以下、各部・各章の順に紹介していく。

第Ⅰ部「伝奇と説話」は唐代伝奇小説が生み出された場、担い手、人物設定の特質等について論じる。唐代伝奇に対する著者の基本的な視点を示し、本書の総論に当たる。第一章「伝奇作者の身分と立場」は個々の話柄を見聞・伝承し文章化した階層として「使職の辟召による僚佐」、とくに「従事」の役割に着目する。従事が中央から地方へと任地を移動することによって人的交流の場を持ち、そこでの伝聞を文字に表わし、かつその社会的立場から生ずる自身の感情や思索を作中に盛り込んだことが旧来の文学規範を脱する作品を生み出す要因となったとする論は具体性と説得力を持つ。第二章「伝奇と説話」では「寄り合いの文学」という概念を設定し、「奇事」「異事」以上に「人」にまつわる奇異についてその「艶麗」な内容に伝奇の本質があると指摘する。これは第Ⅲ部の論考に繋がる。第三章「唐伝奇における第三人物形象について」は主人公となる男女の恋愛を陰に陽に助けてこれを成就させる役割を担う人物、すなわち第

三人物の姿と役割を取り上げる。「鶯鶯伝」における紅娘のような役割は知られているが、本論ではさらに「李娃伝」などを元に従来の文学には登場しない社会の底辺に生きる様々な生業の人々の姿に着目する。その先には、宋代以降の小説が「巷間の人情や恋愛」、「英雄豪傑」等の活躍を描いて多くの読者を得ることになる文学史の流れが見据えられている。第四章「伝奇と筆記―中国小説史上の主題に即して―」では「伝奇」を「語り」に出て後世の諸宮調・院本・雑劇に繋がり、「筆記」を文言による記録鈔写により筆記小説に繋がるとする。本論末尾の付表「中国小説史の系譜」は先秦から清に至る小説史の流れを整理しており、今後の議論の礎石となろう。

第Ⅱ部「志怪の系譜」は唐代小説が六朝志怪の影響を受けつつ伝奇としての特質を獲得していく、その変化を跡づける。第一章「「李章武伝」管見」では、胡人採宝譚、冥魂譚の要素に六朝志怪以来の特徴を認めつつ、恋情の普遍性を描く点に伝奇への推移を見いだす。博学で知られる西晋の詩人張華との相似の指摘は従前にない新見である。第二章「「謝小娥伝」札記」は「曹娥碑」故事の影響や、江流復冤譚、尼寺縁起譚としての性格について論ずる。作者にして作中人物である李公佐の描かれ方に着目して包拯を典型とする宋代以降の公案物との類似を指摘するのは、文学史上の位置づけに関わる重要な観点と言える。「謝小娥伝」とその「同話」に当たる「尼妙寂」との詳細な比較は、著者の立論が着実な本文の検討の上に成り立っていることを示している。思うに、「謝小娥伝」ほどではないが、ある物語について「同話」ないし関連の深い話が複数存する例は唐代も後期には目に付くようになる。「類話」の問題と共に、今後の研究課題となると考えられる。第三章「「柳毅伝」演変」は中国南方の民間伝承「海竜王的女児」との繋がりについて考察する。口頭伝承には文字文献からの口承化といった問題も考慮される必要があるが、確かに唐代小説には土地との結びつきを強く感じさせる作品が少なくない。今後検討に値する研究方法と言えよう。第四章「変虎譚の諸相」は変身者が虎の獣性と人間性の間の矛盾に苦しむ姿が描かれる点に新たな表現を見いだす。変虎譚は志怪小説に多数の例が見られ、ある特定のテーマが志怪から伝奇へと展開していく様子を検証するのに格好の例となる。この変虎譚での論点は第Ⅳ部の論議に繋がる。

第Ⅲ部「恋愛物語」は唐代伝奇の白眉と言える恋愛譚四作を取り上げる。第一章「「霍小玉伝」校覈」は虚構性と第三人物形象に注目した論考。「黄衫の豪士」が冥界の使者の形象と重なり、その行動が仏教の因果応報や平等の観念に依拠すること

を小玉母子の平生や「崇敬寺」という舞台設定、さらに幾つもの類話を例に実証していく過程はスリリングである。第二章「「鶯鶯伝」における作者の自照性について」と第三章「玄宗と楊貴妃の物語を伝えた「場」―「長恨歌」「長恨伝」の背景―」は共に詩歌との関連が深い論考。第三章は「長恨歌」や「長恨歌伝」の成立の背景に楊貴妃と玄宗のことを語る人々とそれを詩文にまとめる人々がいたことを関連する詩文を丹念に集めて浮かび上がらせており、説得力がある。唐代において小説研究が詩歌の研究と不可分であることをよく示している。第四章「「李娃伝」と物語を支えた人々」は当時の社会の下層に生きる人々の生業の実際を『太平広記』中の作品から探索した上で論ずる意欲的な論考。もと娼妓であった李娃が士人と結婚し、最後は「夫人」の封号を与えられるという当時の価値観ではあり得ない設定が可能となった背景について、「娼妓李娃の背後に広がる物語の伝承者を考えざるを得ない」（二八八頁）とする問題提起については、今後さらなる明証が待たれる。

第Ⅳ部「唐代伝奇の新たな地平」は唐代伝奇において新たに生まれたテーマに関する論考。第一章「「杜子春伝」臆説」は、仙人となる理想を求めつつ挫折する自分を見つめる目や、平凡な日常にこそ幸福はあるとする点に唐代伝奇の新たな達成を認める。従来「奇」を描くことに関心が集まっていた唐代伝奇のテーマについて再考を促す点で第四章の「魚服記」とも繋がってくる。第二章「「枕中記」校弁」では人生における「適」を白居易の詩に見える「適」と比較する。詩歌と小説に跨がって中唐文学全体の特質を考える論考。時間の表現、「枕」の役割など、個別の検討も興味深い。なお、「枕中記」と同じく一眠りの間に一生の浮沈を経験する「南柯太守伝」との異同についても言及がほしかったところである。第三章「唐伝奇「崑崙奴」芻議」は崑崙奴の人物形象について先秦遊侠の徒や『荘子』醜陋仙翁説話に遡って考察する。唐代伝奇の新しさが前代からの継承性を有しつつ新たな人物形象を生み出していることを証する論考。第四章「「魚服記」の主題」は題材を殺生勧戒説話と遊離魂に得ながら、主題を変身遊泳による異境への到達願望とそのために遭遇する危難との葛藤の描出にあるとする。仏教の殺生勧戒を主題とする類話との相違について、変身の理由や自主性、網と鉤との違い等を元に比較するのは説得的である。

第Ⅴ部「附篇」のうち第一章「「七夕」伝承について」と第二章「唐詩に見える「青冢」をめぐって」は共に伝承・伝説の研究に重要な資料として詩歌を用いる。第二章では史実の探求とは別の、文学としての継承性の重要さを指摘する。第三章「日

本における唐代小説の研究動向について―一九九七年～二〇〇六年―」と第四章「わが国における唐代小説の研究動向について―二〇〇七年～二〇一七年―」とは、あわせてこの二十年におよぶ日本における唐代小説研究を概観する。第四章の末尾に、近年の唐代小説研究の進展にも関わらずなお先行する唐詩研究には及ばない理由について、「小説の持つ多岐にわたる構成要素の複雑性と関連諸領域との協力が求められる多様性があるからだと思われる」（四五八頁）とあるが、そのような困難に立ち向かった研究の例として第五章「岡田充博著『唐代小説「板橋三娘子」考』書評」は執筆されたものと推察される。

以上、本書は第Ⅰ部の総論に続いて第Ⅱ～Ⅳ部を唐代伝奇十二作に関する個別の論考に当てる。この十二作に唐代伝奇の主要な作はほぼ含まれる。従来の研究書にこれだけ多数の主要作を各話にふさわしい論点を設定して論じ、かつ唐以前から以後にわたる史的展開について論ずるものは見当たらない。この点にまず本書の意義がある。以下、注目すべき点について記す。

第一に、唐代伝奇の担い手として「従事」の存在に着目したこと。担い手についてはこれまでも論じられているが、その社会的階層を問うのはもとより文学との関わりによる。唐代は前代に比して士人の流動性が活動地域においても身分においても格段に増した時代であるが、様々な場における種々の階層との接触により、物語を見聞し伝承する媒介者の役割を担い、かつこれを文章化する能力を有する士人として「従事」を見いだしたのは優れた観点であった。これは、唐詩において中唐以降に新たな詩風を生み出した階層の問題とも重なる。

次に、第三人物形象への着目。人物形象の解明は小説研究の王道ともいえる。唐代伝奇に男女の主人公以外に魅力有る人物が登場することは六朝志怪との大きな相違であり、またそれゆえ宋代以降の文学の藍本ともなり得た。ことに「李娃伝」や「崑崙奴」など、社会の底辺層や外縁部に属する人々をも取り上げ、その姿を同時代の文献中から丹念に収集して作品読解に用いた点は従来の研究を前進させたものと言えよう。

第三に、唐代伝奇の重要な主題の一つを、理想の追求と危難の出現との間に揺れ動き葛藤する自己を見つめる主人公の描出という点に見いだしたこと。これは「杜子春伝」「枕中記」「魚服記」や変虎譚に関する論に見られるが、思いのほかに各話の先行研究とは異なった観点である。「魚服記」の末尾に、現世に蘇生した薛偉は病気平癒ののち華陽の丞に昇進して卒したとある。右の観点を元にこれら各話を再読するならば、薛偉は蘇

生後どのような思いを抱いて人生を歩んだのか、杜子春や盧生のその後と同様に、物語が終わって後の主人公の行方について読者に深く考えさせるものがある。

第四に、詩歌研究との関連を積極的に視野に入れたこと。著者自身、本書の「まえがき」に中国古典の詩歌研究、小説研究共に有意義な視点として、（1）文学の規範性、（2）文学の担い手、（3）文学における影響関係の三点を挙げる。思うに、文学規範の変容は作品の担い手の変化に拠り、その担い手は著者の言う「寄り合い」や「座」に見られるように、士人間の影響関係の中で創作する。三者は相互に密接に関係する。「寄り合い」は主に小説に、「座」は詩歌に関わるが、小説と詩歌とを共に視野に入れつつ検討することはきわめて重要である。著者には本書に先立って中唐詩に関する専著、『中唐詩壇の研究』（創文社、二〇〇四年）がある。本書において詩歌との関連に注意が向けられるのは理由のあることと言わねばならない。

最後に、今後の唐代小説研究の課題に関わって二点を記す。

その一、唐代小説の作品数は志怪に類する作も含め、きわめて多数にのぼる。その後世の文学に対する影響の濃淡も様々である。李剣国氏の一連の著作はこれら多数の作にも等しく基礎的検討を加えてきわめて有益であるが、もとより個々の作品内容について掘り下げた検討をなすものではない。日本では溝部良恵氏が唐代小説の最盛期とされる中唐期以前の作について鋭意研究されている。同様に中唐晩唐期の必ずしも著名ではない作についても視野に入れ、個々の作品とそれが本来収載されていた作品集との両方面から検討が必要であろう。

その二、唐代小説は李剣国氏の言う「興盛後期」から「低落期」になると書物の上での摂取・継承関係が想定される作が目に付くようになる。文章表現に意匠を凝らす裴鉶『伝奇』所収の作の一部はその例であろう。本書が取り上げる唐代伝奇の代表作はこれに先立つ「興盛前期」の作が割合としては多く、またそこにこそ口頭伝承との繋がりや旧来の規範を脱した文学としての活力が認められるわけであるが、唐代小説の全貌をうかがうには先に記した作をも含めた検討が必要であろう。

以上、今後のこととして二点を記したが、実はこの二点共に唐代伝奇小説の精華と見なしうる多数の作を中心に検討した本書の研究が何よりその基礎となる。中心部の研究無くして周縁部ないし全体像の研究には進展しえない。その意味でも、本書は今後の唐代小説研究に大きな役割を果たすと思われる。

（A5判上製、五三〇頁、研文出版、二〇二一年二月発行、定価八〇〇〇円＋税）